

論文の内容の要旨

論文題目：日本人男性と婚姻関係にあるロシア人女性移住者の文化人類学的研究
—エージェンシーの視点から見たライフクラフティングの過程—
(Russian Female Migrants Married to Japanese Men: The Process of Life-Crafting From the
Perspective of Agency)

氏名：ゴロウィナ・クセーニヤ

本論文は、日本人男性と婚姻関係にある 50 人の日本在住ロシア人女性移住者を対象とし、ポストモダン社会の特徴である過渡性を背景として、彼女たちの移住を決めたタイミングから、将来像を含む現在に至るまでの人生そのものの作り方（ライフクラフティング）のプロセスを考察し、対象者の人生における越境と日本人男性との結婚の位置付け及びその意味を探ることを目的としたものである。

本論文のための文化人類学的な調査は、第 1 期 2008 年 1 月～9 月、第 2 期 2010 年 1 月～2011 年 2 月に行われ、調査地は主として東京都・新潟市・富山市である。50 人のロシア人女性インフォーマントの他、彼女たちの状況を理解するに当って重要と判断された 20 人のサイドインフォーマントのデータを採用している。主な調査方法として用いたのは、インタビュー、参与観察、関連組織での聞き取り、文献調査（ロシアへの出張を含む）などである。

本論文の理論的枠組みとして、データ分析の際にまず用いたのは、グラウンデッド・セオリーである。本アプローチは、調査において収集されたデータの記号化を行うことで、データ自体の独自性に基づきながら、その共通点と相違点を明らかにし、徐々に特定の議論をまとめていくという解釈である。次に、2 つ目の理論的枠組みとなったのは、女性移住

研究で頻繁に使われるエイジェンシーという用語を取り入れたアプローチである。これは、社会理論研究のストラクチャー対エイジェンシーというフレームワークを利用したもので、先行研究の解釈を発展させた形で用いることとした。

本論文は、序論に続く10章から構成されており、各章ごとの内容は以下のとおりである。

序論では、本論の目的と上述した理論的枠組み及び論文の構成を説明する。繰り返しになるが、本論の目的は、日本人男性と婚姻関係にあるロシア人女性たちのライフクラフティングの描写を通して、エイジェンシーの働きを明らかにした上で、彼女たちの人生における結婚の意味を考えることである。本論全体は、彼女たちの今までの人生の背景となる「構造」を、「根の層」と呼べる歴史・地理のような彼女たちとの距離が最も遠い部分から、彼女たち自身の心理的状态という近い部分まで考察し、彼女たちが囲まれ、内面化してきた層を1つ1つ剥がしていくような方法で、問題の核心を見届けるという構成で作上げられている。

まず、第1章では、議論の大きな背景となるポストモダニティの特質とエイジェンシー論について述べ、女性の人生において、彼女たちのライフチョイスを大きく左右するものとしての結婚について、ジェンダー問題を考慮しながら、全体としての現代女性と、その中でのロシア人女性について考察する。

第2章では、現代ロシア人女性を取り巻く歴史的・社会経済的・ジェンダー的状况に焦点を当て、彼女たちが移住を企図し、実際の行動に至って「移住者」になるまでのプロセスにおいて機能する、メディアにおける女性移住者像と、ロシアを出発点とする移住を困難なものにし、アクターの閉じ込め性の原因となって恐怖を煽りながらも、だからこそ出国したいという気持ちを高めるビザ取得概念について考察する。また、ロシア人女性を取り巻く国際結婚事情についてのデータを挙げ、日本でのロシア人女性による国際結婚と異なる形態をとるが、エイジェンシーの側面では繋がりが明確になることもある、エジプトでの結婚を事例として、ロシア人女性の向上戦略について述べる。

続いて第3章では、対象者の一部が属すロシア極東と日本海側都市に代表される、日露間移住の歴史的な形成・実践について述べ、対象者の地理的属性に細かく焦点を当て、日露関係の歴史性が、彼女たちの移住パターンに与える影響について考察する。更に、近年改善されていると言われる、ロシアにおける地域ごとのリソースの不均等な分布について、異なる出身地を持つインフォーマントに、来日前後の教育状況を含むどのような可能性の差異があるかを、地理的属性によって作成したユニットのマトリックスを用いることで、分析する。

第4章では、女性移住と国際結婚に関する先行研究を幅広く用いて、結婚移住や国際結婚の定義の見直しを試みると同時に、対象者が日本で属している結婚の種類を詳細に紹介し、彼女たちの結婚において「国際性」がとる形を探る。このように、第4章までは、対象者を取り囲む最も大きな「構造」、つまり、現代性やジェンダー、歴史性、社会経済的状況、地理的属性、移住と国際結婚の経験について説明する。

次の第5章では、彼女たちの越境経験に注意を払い、来日からロシアへの物理的・象徴的「行き来」までを、その語りから描写する。その中で、彼女たちの移住動機として再形成されたエスニシティの問題や背景となった文化的空間の特徴について明らかにし、それらが日本でのアイデンティティ構築にどう関与するかを考察する。また、日本人男性との結婚の際の両親による反対、暮らしの交渉などについて論じる。更に、彼女たちの中に存在し続け、行動を特徴付ける「ロシア像」についても細かく述べ、ロシアにおいて社会文化的意味合いを持つものとして見出された「ベンチ」という、「モノ」でありながらも、彼女たちの日本での経験理解に役立つ象徴について考える。

第6章では、夫となる日本人男性と妻との関係に焦点を当て、まず、男性の年齢や職業について述べる。その中で、国際結婚における既存の男性像について明らかとし、ステレオタイプ的な「年上であること」への期待の形成プロセスに注目する。また、日露カップルの愛情表現に関わる葛藤やセクシュアリティについて、現代日本における結婚の形態を論じながら考察する。

続く第7章では、対象者の来日前後の教育と職業について、先行研究のデータを紹介しながら議論を展開し、これまで強く主張されてきた女性移住者の「働きたい」という気持ちを疑問視する。彼女たちは、成長の可能性がある場合でも、キャリアの追求ではなく、単純労働や働かないことを選ぶのだが、そのような移住者の状態と心理を探り、内面から彼女たちのエイジェンシーを抑制する構造的機能を見出しながら、「怠慢」や「臆病」な状態の背景を問う。更に、この議論のために「移動のリテラシー」というコンセプトを示し、移住者にとって必要であるが、対象者の多くに確認できなかった当概念の内容を論じ、その欠如が対象者を臆病な状態に導くと仮定する。最後に、移住者のエイジェンシーを理解するのに重要とされる、ロシア人女性移住者による仕送りについて紹介し、そこから彼女たちとロシアに残った家族（語りに登場した両親や兄弟）との関係について論述する。

第8章では、対象者の心理的状态を細かく考察し、インフォーマントの一部に見られる、エイジェンシー発揮度が最大制限されているケースを中心に議論する。逃避としての移住を大きな背景枠組みとして、日常における引きこもりや破壊的な行為、生活習慣性の否

定などについて、事例を挙げながら述べ、逃避という問題そのものについて幅広く議論を行う。

次の第9章では、来日前後に生まれた彼女たちの子供に焦点を当て、「移住者」や「成功した妻・母」としてのアイデンティティ構築において、母の人生における子供たちの位置付けと「道具性」について論じる。また、第7章及び第8章で示した彼女たちのある種の諦めという心理状態の理解に繋がる、子供たちへの「責任の転嫁」について述べる。更に、生まれた「ハーフ」の子供たちの教育問題やアイデンティティなどについても紹介する。

結論を含む第10章では、まず、インタビューの最後の質問である彼女たちの将来の夢について考察し、幾つかの方向性を見出しながら、ポストモダニティの過渡的特質が許す限り、そこに生きる彼女たちの現在における「姿」を描写する。また、改めて、彼女たちが後にしたロシアの90年代・2000年代の特徴について、語りの中に登場し続けたロシアとの象徴的「行き来」を反映させる形で述べるとともに、越境を通して形付けられる彼女たちにとっての結婚の意味について論じる。このように、彼女たちの日本におけるライフクラフティングの考察を通して、これまでの女性移住者研究には見られなかった、彼女たちの僅かに「悲しい」複雑性で特徴付けられる多くの矛盾を含む状態を、その一時性を考慮しながら示すこととする。